



ローラ・エインズワース
Laura
Photo courtesy of Swing City Production
Ain sworth

レトロ・ジャズ・シンガーの
 3作品が本邦初登場！
 “私のサウンドは…古い要素と
 新しい要素のブレンドでありながら、
 新鮮で活気に満ちた
 パーソナルなクラシック・サウンドを
 生み出しています”

ミュージック・プレイズ・オン) や、ベティ・ハットンのシングルB
 面曲で、自身の録音後にナット・キング・コールがとてり似たアプ
 ローチで吹き込んだことを知ったという(ザッツ・ザ・カイン
 ド・オブ・ガイ・アイ・ドリーム・オブ) は、ローラの探求心の成
 果と言えよう。また90~2000年代のロック曲からの(キーブ
 イット・トゥ・ユアセルフ)と(ファンタスティック・プラネット・オ
 プ・ラヴ)をコンテンポラリー・サウンドに仕上げたのは、ニュー
 スタンドの意識ゆえだと想像できる。

デビュー作が高評価を得たローラは2013年に第2作「ネセサ
 リー・イビル」をリリース。フィルム・ノワール(虚無的、悲観的、
 退廃的な指向性を持つ40~50年代の米国犯罪映画)に着想を
 得て、「魔性の女」と「恋人に捨てられた女」の対照的なキャラク
 ターを演じたコンセプト・アルバムだ。タイトル曲に関して、ロー
 ラは以下のように語っている。「エラ・フィッツジェラルドとルイ
 アームストロングの(ネセサリー・イビル)を初めて聴いた時、自
 分にとって素晴らしいソングになると思いました。強力なフレーズ
 なので、すぐにアルバムのタイトルになると思ったのです」。

1曲目と最終曲にホーン・セクションが入った本格的なビッグバ
 ンド仕様にした理由については、「大胆なオープニングとエンディ
 ングでブックエンドのように機能させ、繰り返し聴いてもらえるよ
 うに設計しました」。

エラやフランク・シナトラが20~30年代の楽曲を、50年代
 当時の新しいサウンドとして表現した手法にヒントを得ていたロー
 ラは、2017年に第3弾「ニュー・ビンテージ」を発表。「私のサ
 ウンドは現代的なヴォーカル・ジャズではありませんが、古臭い
 というわけでもありません。古い要素と新しい要素のブレンドであ
 りながら、新鮮で活気に満ちたパーソナルなクラシック・サウンドを
 生み出しています」。トニー・ベネットの歌唱版がある(ホエア・ディ
 ド・ザ・マジック・ゴー)はビデオが制作され、父ビリーの名前を
 歌詞に加えてトリビュート曲としたのが印象的だ。以上3タイトル
 すべてのプロデュース、アレンジ、ピアノを務めたブライアン・バ
 イヤーの優れた貢献も見逃せない。

「私の音楽をみなさんと共有できて光栄に感じます。私の音楽を
 聴いて、私と同じくらい「ニュー・ビンテージ」のサウンドを楽しん
 でくださることを知って嬉しいです。いつか日本を訪れて、その素
 晴らしい園を見て、みなさんのために歌いたいと思っています」。

(杉田宏樹)

昨年コンビレーションLP「トップ・セルフ」で本邦デビューを
 果たした、米テキサス州ダラスを拠点に活動するレトロ・ジャズ・
 シンガー、ローラ・エインズワース。トミー・ドーシー楽団に在籍
 し、エラ・フィッツジェラルドやトニー・ベネットを助演したサク
 ス&クラリネット奏者の父親の血を引いて、子供の頃からビッグバ
 ンドや女性ジャズ・ヴォーカルを好んで聴いて育ったローラは、CM
 プロダクションでの作曲や俳優活動を経て、歌手として生きてい
 くことを決意した。忘れられていた古くて珍しい曲を録音すること

が、昔のアーティストと楽曲の記憶を生きかし続けることだと悟ったから
 であった。

2011年のデビュー作「キーブ・イット・トゥ・ユアセルフ」では
 早くも成熟した歌唱を聴かせている。

「私は父のおかげでジャズを聴いて育ちましたが、レコーディン
 グを始めたのは多くのプロジェクトで歌い、人生経験を積んだ後から
 でした。知名度を得ることや、自分の声や個性を最もよく反映す
 るものについて考える時間もありました。また私のアルバムが最高

のプロダクション、ミュージシャン、曲順、およびパッケージを備
 えていることに確信を持ちかけたのです。メジャー・レーベルから
 出る今の作品ばかりでなく、私が影響を受けたリイシュー作とも
 競わなければならないので」。

〈ラヴ・フォー・セール〉や〈スカイラーク〉のような有名曲は半
 数以下にとどめて、あまり知られていない楽曲を中心としたプログ
 ラムは、玄人筋のヴォーカル好きにも発見があるはずだ。ドリス
 デイとレス・ブラウン楽団の共演音源で発見した〈ホワイル・ザ・